



## 有病高齢者の歯科治療におけるリスクマネジメント

大渡 凡人

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野 准教授

我が国は2007年に世界で唯一の超高齢社会となったが、高齢化率は今後も上昇することが予測されている。歯科外来においても高齢者の受診は増え続けている。社会保障国民会議によれば、2025年の居住系療養者ならびに在宅療養者は2009年の2倍になると予測されている。訪問歯科診療の対象となる高齢者もますます増えるであろう。

高齢者の重要な特徴が複数の全身疾患の合併である。厚労省による医科外来・入院受療率統計によれば、ほとんどの全身疾患において受療率は65歳以降で指数関数的に上昇している。また、高齢者は複数の全身疾患を合併することが多い。さらに、医療技術の進歩により、少し前までは生存さえ難しかった重篤な全身疾患を有する高齢者が歯科受診するようになっている。演者の外来でも心肺停止後の高齢者や、高度な植込みデバイス装着患者などの受診が増えている。一方、高齢者は全身疾患数に比例して多くの薬剤が処方されている。なかには顎骨壊死のリスクがある骨修飾薬や、現時点では対応が十分に明らかではないNOACsと呼ばれる新しい抗凝固薬なども含まれており、対応を一段と難しくしている。

これらの変化を背景として、高齢者の歯科治療では全身的偶発症のリスクが上昇し、しかも問題が複雑になっている。その一方で、社会の医療安全への要請は一段と強くなっており、医療過誤に対する社会的制裁は厳しさを増している。我々歯科医師は、人口高齢化に伴うこのような変化に上手に対応し、いわゆる有病高齢者の歯科治療におけるリスクをうまくマネジメントする必要がある。

講演では「有病高齢者の歯科治療におけるリスクマネジメント」と題して、重要性の高い全身疾患ならびに薬剤について解説し、全身的偶発事故の可能性を低下させるためのリスクマネジメントの方法、全身的偶発症発生時に歯科医師として行うべき対応などについてわかりやすく解説する。

### 【略歴】

- 1983年 九州歯科大学卒業
- 1987年 東京医科歯科大学大学院歯学研究科歯科麻酔学修了
- 1987年 新潟大学歯学部第1口腔外科学講座助手
- 1989年 東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学講座助手
- 2000年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔老化制御学講師
- 2006年 国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科助教授
- 2007年 国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科准教授(現在に至る)